

《改訂版》

たそがれ まどろ

# 黄昏に微睡む

Wonderful tonight

作 伊藤風柳

《登場人物》

倉淵武佐志 (67) 夫  
倉淵美沙子 (69) 妻

《声》

松方 (45) 民生委員

※開演前

舞台の中央、古いロッキングチェアが照明に浮かび上がっている。

客入れ音楽の最終楽曲はエリック・クラプトンの♪wonderful  
tonight♪。

客電が徐々に消え、照明も楽曲の後奏と共に落ちて行く――

○暗転状態

静寂、玄関の呼び鈴の音――静寂――

松方の声「御免下さい――御免下さい、倉淵さん？――民生委員の松方です。

倉淵さん、いらつしやいますか？――倉淵さん？」

○倉淵家・居間（晩秋）

徐々に明るくなる。

質素（無機質）な室内空間。

下手、古いロッキングチェアと木製のサイドテーブルがある。

ロッキングチェアの座面上には、紫色の編み掛けのセーターと臙脂色の  
膝掛け、テーブル上には紫色の毛糸玉が置かれている。

上手、隣室との間仕切りとなるモダンな障子戸がある。

美沙子（69）が切り花を活けた花瓶を持って下手から登場。

花瓶をテーブル上に置き、シウウメイギク、ネリネ、サザンカの調和を  
整えながら――

美沙子「――誤解、思い違いでしたわ。この歳になって今振り返ると、微笑ま  
しい思い違いです。あの時、何故あのように思ったのかは、もう忘れ  
てしまいましたね」

編み掛けのセーターと膝掛けを持ち、ロッキングチェアに座る。

美沙子「――いいえ、そんな……私は、恋の駆け引きなど上手ではありません  
ご存知でしょう？ あの時の私の思惑は、記憶の彼方へ消えてしま  
いましたけれど、あの時のあなたの面影は、今でも記憶の片隅に残って  
いますよ。（編み始めて）フッフ、そう、梅雨が明けたばかりの初夏。  
初めてのデート。あれは、デートでしたよね？ 私は病弱な母の世話  
に追われていたものですから、あなたからのお誘いを、幾度かお断り

してしまつて。ようやく。あの時が初めてでした。陽射しの強い日はありませんでしたけれども——覚えていますか？あなた、喫茶店でホットコーヒーを注文しました。額の汗をしきりにハンカチで拭いながら、テーブルのセットからスプーンでお砂糖を5杯も入れて。そのスプーンで、コーヒーをかき混ぜてしまつて、『あッ、すみません』つて。しかもですよ。スプーンをそのまま容器の中へ戻したものですから、お砂糖が付いてしまつて、また、『あッ、すみません』です。フフフ、慌ててスプーンを取り出したら、今度は、自分のお口の中へ入れて舐めてしまつて、フフフ、『すみません』——あれは、お店？私に？誰に謝っていたのかしら？緊張なさっていたのか、無頓着なのか、デートに不慣れなのか——フフフ、ホラ、あなたが不器用なことを、知らない頃でしたからね。私、呆気にとられて不思議な感覚になつてしまい、何故か、『この方とお付き合いしたら、結婚したら、いっお別れして良いのが、判らなくなつてしまふわ』と思ひました。可笑しいでしょう。訳の分からない奇妙な印象でしたね。誤解？思い違いでしょうか？お別れすることを、先に考へてしまふなんて。まだ、何も始まつていませんでしたのに——」

午後3時を伝える時計の音。

ロッキングチェアの座面上に編み物と膝掛けを置いて離れ、背伸びをしたり首を回したりと、身体を軽く解す。

照明が夜間の趣きを作り出す。

——間——

障子戸の奥（隣室）が少々明るくなる。

美沙子「——還暦のお祝い以来でしたの？ 私達の、結婚式にお見えになつた

——ええ、そうです。それから、毎年年賀状を下さる——そう、そう

ですわ。お二人共、お変わりありませんか？（障子戸の方へ歩み寄つて）

——それは何よりですね————そうでしょう。そのうち、お孫さんどころか、曾孫のお話も聞かされるようになりますよ。同窓生でも、みなさん、人生、いろいろ——」

照明が元の状態に戻る。

——間——

微かにヒヨドリの鳴き声。

障子戸から離れてロッキングチェアの方へ戻り、背もたれに手を添える。

美沙子「……すみませんね……（項垂れて）申し訳ありませんでした……私の不用心で、お腹の子を亡くしてしまつたばかりに。私の病気の所為で、子供を諦めてしまつたばかりに……年上の私と一緒になつてしまつた

ばかりに……(少々の涙声になって)肩身の狭い思いを……子育ての喜びや楽しみや、嬉しい苦勞も、賑やかな団欒も、知らないままに、させてしまい……ごめんなさい……でもね」

編み物と膝掛けを持ち、微笑む。

美沙子「あなたが、どう思っているかは判りませんが、私、胸が熱くて、心の温かくなる恋を、長く続けさせて頂いています。そう、本当、涙が溢れるほど……(泣き笑い気味で)フッフ、あなたのお陰です——私がどれほどあなたを愛しているか、武佐志さん、あなたは気付いていませんわ」

ロッキングチェアに座り、編み物を再開する。

男(武佐志)のシルエットが、障子戸に浮かび上がる。

武佐志の声「僕には、ファッションのセンスがない。だから、花束や鉢植え、苗木などを、誕生日プレゼントで贈ることにしたんだ。以前君は花屋で働いていたからね。それらを、押し花にしたり、ドライフラワーにしたり、庭に植えたり、挿し木をして増やしたり。我が家は、君の作った自然の子供達で賑やかだ。——僕は、毎年少しでも、君と君の周りを、華やかに、鮮やかに彩ることが、出来ているだろうか？」

武佐志のシルエットが消える。

美沙子「——覚えてはいないでしょうね？ 今でこそ、あなたの誕生日には、毎年初めての新作料理をお出ししていますけれど、新婚の最初の時、私が何をプレゼントしたのか——あなた、一度もお使いになりませんでした。手編みのマフラー。何故ですか？ 無地より柄模様の方が良かったのか、色が好みではなかったのか、長さや横幅がお気に召さなかったのか!? お使いにならない理由を仰って下されば良いのに！ 手編みが嫌とか、マフラーが嫌とか、何も判らなければ、どうすることも出来ませんよ！ あの頃はあまりのことでしたから、ある日、私、思い切って一切口を利きませんでしたの！ 気付きましたか!? 怒っていたのです！ 腹が立ったのです！ 『フンッ!』という感じだったのですよ!! たった、一日だけでしたけれど……」

編み物のセーターを目の前で広げると、膝掛けと一緒に編み付けている。

美沙子「アラ、いつの間に——マントみたい、フッフ。もうチョツとでしたの

に。これは誰のでしょうね？（編み物を解き始めて）あの頃のあれが、最初の、恐らく最後の、夫婦喧嘩です。私は、喧嘩と思っています。ほんの一日限り。次の日はドライブで海へ連れて行って頂きました。――何故、あのマフラーを巻いて頂けないのでしょうか？」

編み物を解く手が毛糸玉に打つかり、毛糸玉は床に落ちて転がる。  
ロッキングチェアから離れて――

美沙子「一つ、お願いがあります。これ以上、お気を遣わずに。結婚記念日、特に節目の年のプレゼントは、私には勿体ない高価な品物ばかりですもの。（毛糸玉を拾って）我儘ですよ。あなたの優しさや思い遣り、愛情に触れる度、充分に応え切れていない自分が、情けなく、心苦しく思えて。自分で自分が嫌になります。喜びと悲しみを、同時に感じてしまうのです」

ロッキングチェアに座る。

美沙子「――これは、幸せの傷。贅沢な痛みなのかもしれません。（編み物を再び解き始めて）今度の春で結婚40年。久し振りに二人で温泉にでも行って、何日かのおんびりとしませんか？ プレゼントは、二人だけのゆったりとした時間が良いですね」

照明が夜間の趣きを作り出す。

――間――

障子戸の奥が少々明るくなる。

武佐志のシルエットが、障子戸に再び浮かび上がる。

武佐志は着替え中のようなのである。

武佐志の声「次の同窓会はいつになるかな。歳やら体調やら暮らし向きやら、なかなか思い通りには――」

武佐志のシルエットが見上げる。

武佐志の声「おお、今夜は綺麗な満月だよ、美沙子さん。晩秋だね」

手を止め、上手の上部へ視線を向ける。

美沙子「ええ。残秋、名残の秋ですよ。ここからでも良く見えます。秋の夜長に煌々と輝いている丸いお月様。お庭のリンドウやススキが月明かりを浴びて綺麗でしょう？」

武佐志のシルエットが見下ろす。

武佐志の声「ああ。キンモクセイも小さな花を咲かせたね。もうじき、サザンカも花を——堀井、同窓生の堀井が、柄にもなく、結婚記念日に奥さん孝行をしようとしたらしい。でも、奥さんには既に予定があつてね——アイツなりに奮発して、クラシック音楽のディナーショーを。食事付きの演奏会のような。まあ、チョットとしたパーティーなんだろうね。そのペアチケット、半額で譲り受けたんだ。美沙子さん、再来週、行こう」

美沙子「はい？ 再来週!？」

武佐志の声「うん。何曜日だったかな？」

美沙子「チョット。チョットと、待って下さい。突然、そんな」

武佐志の声「突然だね。今夜の話だったから」

美沙子「そんな。パーティーですって？」

武佐志の声「パーティーらしいよ。あ、誰の曲とか何料理とかは聞いてないか——」

美沙子「お洋服です！ 私、お洋服、どうしましょう!？」

ロッキングチェアから離れ、小走りに下手へ退場。

武佐志のシルエットが消える。

障子戸の奥が元の状態に戻り、照明が夕方の趣きを作り出す。

——聞——

防災行政無線チャイム♪七つの子♪が遠方から聞こえて来る。

数着の洋服（ドレス）を抱えて再登場。

美沙子「——武佐志さんは、人が悪いですよ。いつも突然驚かせて。きつと、

慌てる私を面白がって、楽しんでいらっしやるのね。悪戯好きな子供みたいに」

洋服の束をロッキングチェアの背もたれに掛ける。

美沙子「パーティーは、どのような感じなのでしょう？ クラシックを静かに鑑賞して、お料理を粛々と頂くものかしら？ そうでしたら、落ち着いた雰囲気はこちらとか。（洋服を身体に添えて）どうでしょう？もしかしたら、楽曲に合わせて踊る、ということもありますかね？そうなら、少しでも動き易い方が。（洋服を身体に添えて）流石に、流行遅れは否めませんけれど、物は良いはずですよ。あ、フフフ、無理そうですわね。武佐志さんに踊りなんて。そういうお話は一度も、フフフ。ご存知ではないでしょうか？ 私、子供の頃に、踊りを少しだけ習ったことがありますの、フフフ」

洋服を次々と身体に添えながら、楽しそうに、軽やかに舞い踊る。

美沙子「——お料理は何かしら？ 和食や中華ではありませんね。やはりフレ  
ンチ？ 作曲家や楽曲に因んだお料理かも。フッフ、いけませんわ。  
食い意地が張って。花より団子、色気より食い気になってしまいます。  
ああ、髪形とお化粧はどうしましょう？ このままでは——そうです  
わね。美容院を予約して、夕方までに——」

我に返って踊りを止めて——

美沙子「楽しみです。ありがとうございます——いけませんね、また甘えてば  
かり……（洋服を抱き締めて）私、少し怖いのです。本当は。華やか  
な会場で、恥ずかしく思わない？ 不快な気分にはならない？ 隣に、  
一緒にいるのは私ですよ、武佐志さん。世間知らずな、ただの冴えない、  
お婆さん……ごめんなさい……今更ですわ……私の思い違いは、思い  
の外でしたのね。今も、『いつお別れして良いのか』が、判らないま  
ま……許して下さいな……もう少し……あと少し……（微笑む）」

下手へ退場。

午後5時30分を伝える時計の音。  
アルバムを捲りながら再登場。

美沙子「——昔撮って頂いた沢山の写真が、こういう時は役に立ちますわね。  
以前は、お洋服と、アクセサリー……どのような、組み合わせ、でし  
た？ もちろん、あの、ころ、あの、あの、むかしの、よう——」

アルバムを持ったまま、力なく、ゆっくりと屈み込む。  
更に、床へ崩れて——

美沙子「……あああ……いや……あなた……むさし、さん……！」

徐々に暗転——

### ○暗転状態

玄関の呼び鈴の音。

松方の声「倉淵さん、松方ですが——（独り言で）出掛けているか？ 栖雲寺  
の通りで見掛けたのは、先週、先々週か？ 珍しくピシッとスーツ

なんか着て——倉淵さん、歳末の——」

玄関の引き戸が開く音。

松方の声「アレ？（独り言で）用心だな。——お邪魔しますよ。失礼します」

### ○倉淵家・居間（初冬）

徐々に明るくなる。

照明が夕方の趣きを作り出す。

上手、武佐志（67）が古いロッキングチェアに座り、開いたアルバムを見ている。

その脇には、木製のサイドテーブルがあり、テーブル上には紫色の編み掛けのセーターと毛糸玉、臙脂色の膝掛けが置かれている。

下手、隣室との間仕切りとなるモダンな障子戸がある。

武佐志「——誤解、思い違いからだね。僕にとつては幸運な思い違いだ。

あの時、思わず君から声を掛けられて、緊張して、何も考えられなくなってしまった。いや、僕も客の一人だったから、店員の君が傍に来て声を掛けたのは特別なことではない。でも、一人で舞い上がって、勝手に運命を感じてしまったんだよ。申し訳ないけど、花を買うつもりなんて全くなかったな——（ページを捲って）役所へ通勤する途中の花屋で、君を見付けたんだ。色鮮やかで、綺麗な花々に囲まれて、君は美しい絵画の中にいるようだった。一目惚れ。僕には高嶺の花だ。いつもなら、そのまま諦めてしまうけど、頭から離れなくなって日に日に想いが募ってしまつてさ。あの日は、覚悟を決めてデートに誘うつもりだった。男が花なんてという気恥ずかしさは、『公園緑地課の職員』と、都合良く自分自身に言い聞かせてね。それでもやつぱり、僕は居辛くて、店員や他の客からすれば不審に思ったかもしれない。君はそれを感じて、気を遣つて、あの時、僕に声を掛けてくれたんだろう？ 偶々、母の日の前日だったからさ、勧められて赤いカーネーションを買ったけど——うん、そう。あの頃はもう、母は亡くなつていた。でも、それよりも、近付けた絶好のチャンスを逃すまいとして誘ったんだ。結果、見事に断られた。君は、本当に申し訳なさそうに頭を下げた。愛想笑いなんかで誤魔化したりしないでね——（ページを捲って）何となく、上手く行くような気がした。思い違いだったかな？ その後も、店へ通つて、君が勧める観葉植物を買い、デートに誘い続け。君に対しては、諦めの悪い男だったよ。うん？ ううん、もう既に、君と一緒にの時間とか、君のいる家庭や人生とかを想像して



いてね。両親も兄弟もいなかった僕は、ごく平凡な家庭に憧れていたんだ。当然、君に嫌がられたり、迷惑がられたり、無視されたりしていたら、キツパリと諦めていた。でも、いつも笑顔でいてくれて——こっちこそ、不思議だよ。金も地位もない、見栄えも冴えない男の、何処を気に入ったのか？ 僕にそんな魅力が？ ハハハ、思い過ぎし？ まあ、結婚出来たのは、奇跡か、神様の気紛れかもな——（ページを捲って）覚えてる？ 最初のデートの帰り道、『次は大衆食堂へ』って誘ったのは、君だった。ああ、君の方からだったよ。僕は、その時の君を見て、何か始まりそうな予感、いや、僕達の始まりを実感したんだ」

午後4時を伝える時計の音。

ロッキングチェアの座面上にアルバムを置いて離れ、上着を脱ぎ始める。照明が夜間の趣きを作り出す。

——間——

障子戸の奥（隣室）が少々明るくなる。

武佐志 「——ああ、同窓会はかなり久し振りだね——結婚式で余興を披露した小井土や、律儀に年賀状をくれる林田も（障子戸の方へ歩み寄って）——みんな、変わりなく、元気だったよ——ただ、孫の学校の成績やら部活動やら、見た目のことやら。何とも、自慢話ばかりなんだ」

照明が元の状態に戻る。

——間——

微かにモズの鳴き声。

上着をロッキングチェアの背もたれに掛け、手を添えて撫でる。

武佐志 「——それは悪い癖だ。自分を責めないでほしい。結婚前から、姉さん女房を気にしていたけど、僕と君はたった二歳しか違わない。しかも、『年上の女房は金の草鞋を履いてでも探せ』って言うだろう？ 子供のこと、走って来た男の子を避けて階段を踏み外してしまったんだし、癌も不注意とは関係がない。何一つ、君の所為ではないんだよ。むしろ、僕の方が悪いのかもしれない。君をそんな風に追い込んでしまった。不運を一身に受け止めて、罪悪感に苦しみ続けている君に、僕は謝罪したい」

編み掛けのセーターを着ながら——

武佐志 「君のお陰さ。君が傍にいるからこそ、何年経っても、幾つになっても、胸がときめきながら心の安らぐ恋が続けられている。ああ、年甲斐も

なく言えるね。別に恥ずかしくない。自分の言葉と行動に、世間体や照れなんかもない。僕は不器用で口下手だけど、この歳でも堂々と胸を張って、君の素晴らしいさを街中に自慢したいくらいだよ、ハハハ、はあ？」

セーターには膝掛けが付いている。

武佐志「これは——こういうデザインなのかな？　これ、膝掛けだったと思うけど——君は、判っていない。自覚していないね。どれほど美しく、どれほど愛らしい女性か。その君を、僕は傷付け、悲しませているのかもしれない。だから、罪滅ぼしを——」

セーターの裾を下へ引き伸ばす。

釣られた毛糸玉が床に落ちて転がる。

拾おうとして屈むと、足元がふらつき、その拍子に毛糸玉を蹴飛ばしてしまう。

毛糸玉は上手へ転がる。

女（美沙子）のシルエットが、障子戸に浮かび上がる。

美沙子の声「私は、手料理を振舞うことしか出来ません。プレゼントは難しいですよ。どのような品物を買えば良いのか、手編みの物を喜んでくれるのか、判りませんもの。お料理は、毎年工夫を凝らしていきます——」

武佐志「……（胸を抑えて）しつかりしろ！……いや、もう……充分か……」

深呼吸して長く息を吐き、立ち上がる。

毛糸を手繰りながら、上手へ退場。

美沙子の声「食材選び、下拵え、調理方法、味加減、盛り付け。お料理の本やテレビ番組を見たり、食べ物屋さんのメニューを覗いたりして。一年掛かりの新作です——」

毛糸玉と紙袋を持って登場。

アルバムと毛糸玉をテーブル上に置き、ロッキングチェアに座る。

美沙子の声「実は、酔いの物が苦手でしょうか？　お口に入れた後、泣き出しそうなお顔で。知っていましたわ、フフフ——私は、毎年少しでも、手料理で、あなたのお腹と心を満たすことが、出来ていますか？」

美沙子のシルエットが消える。

武佐志

「——覚えてはいないかな？ 新婚の頃、最初の僕の誕生日に、君から貰ったプレゼントだ。（紙袋から空色のマフラーを取り出して）そのまま、僕の洋服ダンスの奥に、ずっと大切に仕舞っていた——いや、気に入らなかつたのではなく……その、つまり、勿体なくて。君が僕のために、僕のことを想いながら編んでくれた品物だから。宝物？ 家宝はチョツと言い過ぎだな、ハハハ。貰った頃は煙草を吸っていたから、臭いが付いてしまうのが嫌で。そのまま保管だ。煙草を止めたのは、心筋梗塞で入院した後だったろう？——そう、その一カ月前は、君だったね。心臓と脳の違いはあったけど、まさか、ほぼ同じ時期に同じ血管の病気になるとは。病院の人達にも揶揄われたな——笑い話だったのに……こんな……畜生……すまない……このマフラー、使わないまま、巻く機会を逃したままで、もう40年も経ってしまったよ。そう、40年なんだね。春には、結婚40周年だ。いろんなことを、乗り越えて——（アルバムを持ち、ページを捲って）25周年の銀婚式は銀細工のプレスレット、次は真珠のイヤリング、その次は珊瑚のブローチだったね。僕は、5年ごとの節目の結婚記念日に、特別な贈り物を用意した。格好を付けていようが、キザでも、似合わなくてもいい。このまま続けたい。ずっと、贈り続けたいんだ——（ページを捲って）悪い癖でも自己嫌悪でも、君にそう感じさせてしまった謝罪や罪滅ぼしの気持ちには、確かにあるよ。でも、それよりも……僕の問題なんだ。情けないな……君が、結婚を後悔していないか、倦怠感で嫌気が差していないか、本心は別れたのではないか？ 僕は、心の何処かでは、未だに不安を感じて、自信も持てない。だから、その恐れを消すため、度々、サプライズの、突然の事件を仕掛けて、新鮮さや変化の機会を作ってさ……幸せの傷の跡が疼くんだった。贅沢な痛みなんだろうね……春、40年。結婚40周年はルビー婚式と言うらしい」

夕方の趣きが深くなる。

——間——

美沙子のシルエットが、障子戸に再び浮かび上がる。

美沙子は、座って編み物を解いているようである。

美沙子の声「母は、多少裕福な家庭で育ったものの、苦勞の多い人でしたね。

病状が悪化して弱くなってからは、夕陽を見ることが好きでした。ご苦勞様や一日の終わりを告げる時。一日暮らし、生きていられたと感謝する時——武佐志さん、暮れなずむ頃ですよ」

美沙子のシルエットが見上げる。

アルバムから下手の上部へ視線を移す。

武佐志「ああ。夕暮れ、黄昏時だね。サザンカの花が、また咲き始めただろうか？  
赤、白、桃色の交じった花も。賑やかな庭だな。華やかな、華やかな  
……（胸を抑える）」

ロッキングチェアの座面上にアルバムを置いて離れ、首元にマフラーを  
巻き始める。

照明が夜間の趣きを作り出す。

——間——

障子戸の奥が少々明るくなる。

武佐志「——クラシック音楽のディナーショーを。食事付きの演奏会のような。

まあ、チョットとしたパーティーなんだろうね。そのペアチケット、半  
額で譲り受けたんだ。美沙子さん、再来週、行こう」

美沙子の声「はい？ 再来週!？」

武佐志「うん。何曜日だったかな？」

美沙子の声「チョット。チョットと、待って下さい。突然、そんな」

武佐志「突然だね。今夜の話だったから」

美沙子の声「そんな。パーティーですって？」

武佐志「パーティーらしいよ。あ、誰の曲とか何料理とかは聞いてないか——」

美沙子の声「お洋服です！ 私、お洋服、どうしましょう!？」

美沙子のシルエットは、立ち上がって数着の洋服（ドレス）を持つ。

障子戸の奥が少々明るいまま、照明は元の状態に戻る。

——間——

毛糸玉を持って上手へ退場。

防災行政無線チャイム♪七つの子♪が遠方から聞こえて来る。

美沙子の声「パーティーはどのような感じなのでしょう？ 落ち着いた雰囲気  
のこちらとか。（洋服を身体に添えて）どうでしょう？ 楽曲に  
合わせて踊るなら、少しでも動き易い方が。（洋服を身体に添え  
て）フッフ、楽しみです。ありがとうございます」

美沙子のシルエットは、洋服を次々と身体に添えながら、軽やかに舞い  
踊る。

ショパン作曲♪ワルツ第9番変イ長調「別れ」♪が聞こえて来る。

毛糸玉とドライフラワーの束を持って再登場。

武佐志「——美沙子さん、パーティーの曲はショパンだそうだよ。我が家にも

CDが一枚あった。（ドライフラワーをテーブル上に置いて）うん、  
あの日の。君が、あの日に活けた花を、君を真似て、記憶を辿って、

ドライブフラワーに……そう、最後の、花達……君が、育てた、子供達だよ……畜生！ 何てこと！ 何てバカな！」

自責の念に駆られ、嘆き、憤り、毛糸玉を持って歩き回る。

武佐志「あの日、出掛けなければ！ 一緒に連れて行けば！ もっと早く帰っていたら、こんな！ 僕は自分勝手だ！ 無責任だ！ 間抜けなバカヤローだ！ 一番肝心な時に、君の傍にいないで！ たった一人きりで、寂しく、逝かせてしまった!! (胸を抑えて) 取り返しの付かない——」

毛糸玉を壁に投げ付けようとするが、美沙子の遺品と気付いて胸に強く抱き、荒い息遣いのまま弱々しく跪く。

武佐志「——もう、巻き戻せない……ごめん……すまない……すべてを、失くした……一人、独りぼっちで、想い出の中を、生きて行くなんて……二人ぼっちで、想い出を、作って生きたかった……(立ち上がって) パーティーの食事の席で、プレゼントを贈るつもりだ。君の誕生石のルビー、ルビーのネックレスを。(苦笑して) ルビー婚式とも掛けて。結婚記念日は、それを着けた君と、何処かへ旅行でもって——」

毛糸玉をテーブル上に置き、アルバムを持ってロッキングチェアに座る。美沙子のシルエットは、軽やかに舞い踊っている。

武佐志「(シルエットを眺めながら) 会場で、君は、きつとまた驚くだろう。突然のサプライズのネックレスを、嬉しくて試着するかもしれない。その時、君は、僕に聞くよ。『いいかしら?』って。僕はこう答える。『今夜の君は、とても綺麗だ』——僕は踊らないさ。踊れないしね。君を、楽しそうに踊る君を、見詰めていたい。それで充分だ——隣を歩いていると、みんなが振り返る。みんなの眼差しが、君に注がれるんだ。君は、僕に聞くよ。『気分は如何?』って。僕はこう答える。『今夜の気分は、素晴らしい』。素晴らしい——それは、僕の妻が素敵で、僕が、みんなの羨む視線を浴びるからだけではない。そう! 気分がいいのは、君の、君のその瞳に、愛の光が輝いているからだ。小さく灰かただけど、とても美しく、確かな光なんだ! 帰宅後、寝室の灯りを消す時、僕は君にこう伝える。(手を差し伸べて) 『今夜、君は素晴らしい。本当に美しい』……綺麗な、愛らしい、人……」

♪ワルツ第9番変イ長調「別れ」♪が徐々に落ちて行く。  
美沙子のシルエットが消える。

武佐志「(首をすくめて)微かに、君の匂いをするようだね……すまない……今更だ……人は、いつも自惚れや思い違いを繰り返す。変わらない、確かなモノが欲しくて……」

♪ wonderful tonight♪が流れ始める。

武佐志「(アルバムを胸に抱いて)僕は見付けたよ、君を。確かな恋を、愛を、永遠を……いや、まだ、思いの外だろう。僕が、どれほど君を愛しているか、美沙子さん、君は気付いていない……君のいない、世界なんて、時間なんて……君のいない、人生なんて……(苦笑して)君に叱られるのは、承知している。叱ってくれ、僕の傍で……もう少し……あと少し……(眼を閉じ、微笑んで)二人だけ、二人ぼっちの、夢の、続きを……ああ……うつくしい、ぼくの、つま……みさこ……」

徐々に暗転――

### ○暗転状態

松方の声「ああッ、いらっしやったんですか。表から声を――倉淵さん?――チョット、倉淵さん!――えッ!? つい、この間――ああ、あれは、四十九日か……お二人、最後まで……」

♪ wonderful tonight♪が落ちて行く。

### ※閉演前

舞台の中央、古いロッキングチェアが照明に浮かび上がる。ロッキングチェアは静かにゆっくりと揺れている。

再び徐々に暗転――

♪ wonderful tonight♪が落ちる――

《改訂版》『黄昏に微睡む』wonderful tonight』終